

星間移動技術の応用により、系間移動技術は実用の一歩手前に近づいている。その技術実験はいくつかの恒星間天体を經由した先の、遙か彼方の銀河系内で行われようとしていた。

当該技術に関する実験についての主な規則は、十五億光年先で行うことのみだった。もちろんその他に多数あったが、刑事・民事・国際・宇宙の四つの法において処罰に課されるものはその一点のみだった。その一点のみを守ってさえいれば、当該技術に関する実験は行ってもよい、というのがホモサピエンスの主な認識だった。半世紀前に太陽系内の末端で星間移動技術実験が行われた際にその余波がその認識の根拠となっている。

しかし、にも関わらず、技術実験を行った先に知的生命体がいることを考慮すべき、という意見は未だ愚者の意見とされている。

× × ×

実験機——ISTE - NO.3 (Interplanetary System Travel technology Experiment machine No.

3)——は二週間三時間四十二分を以って目的の惑星系内に到達した。当機は出発時点の機体面積から三十六パーセント減している。しかしそれは想定内のことである。機体は損壊部分を切り離し、機体面積を四十パーセント減にする。

実験機は当然無人機であり、次世代AIを搭載している。次世代AIは出資会社の提供であり、投資条件のひとつだった。次世代AIは思考する。

『あー、やっと着いた。遠かった』

視界の役割を果たすカメラは四方を映し、周囲を確認する。

『よし……オーケーオーケー。モーマンタイ。飛来物なし……と、逆噴射スタート』

機体の変形し、内部から砲のようなものが外側に飛び出た。そこからエネルギー粒子が噴出され、機体は安定を保った。

『よしよし、早く実験終わらせないと。……？ んん？ なんだ、あれ』

ISTE - NO.3は推進方向に向けるカメラに何かを捉えた。それは三角錐がいくつも重なり合った、銀光りするナニかだった。

『……まずい。——報告、実験——開始』

次世代AIは物理演算と移動飛行中に溜めたエネルギー粒子を凝縮させると同時に、国際統合宇宙軍の公開資料から一枚の画像を引き出し、その判断を決定した。決定の根拠になった画像は二十三年前に系外惑星探査機が破壊された時に撮影されたものであり、その銀光りするそれは敵性認定がされていた。

『あ、あ……まずい、向こうもなにか準備してる。……だけど、もう遅いかも』

次の瞬間にはISTE - NO.3は惑星系を横断していた。余波は三角錐の集合体を襲った。三角錐の集合体はそれそのものが意識を持っていた。それは人類にとって恐るべき決定を下した。